

# 成果報告書 概要

2011 年度助成 (実践期間：2012 年 4 月 1 日～2013 年 12 月 31 日)

タイトル	児童が積極的に自然にふれることができる環境整備		
所属機関	横須賀市立浦郷小学校	役職 代表者 連絡先	学校長 西田 邦彦 046-865-3921

対象	学年と単元：	課題
○ 小学生	・ 第5学年 総合的な学習の時間（横断的学習） 「理科、社会、国語、家庭、図工…」	教師の指導力向上を目指す教員研修、実験方法指導、教材開発
中学生		子ども達の科学的思考能力の向上を目指す授業づくり、教材開発
教員		ものづくり(ロボット製作等)による、科学分野で活躍する人材の育成
その他		○ その他



実践の目的：	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 自然を大切にしようとする態度の育成</li> <li>② 物や生産することの大切さを実体験から学ぶ</li> </ul>
実践の内容：	2012 年 夏：一つ目の田んぼの枠を作成 2013 年 冬：二つ目の田んぼの枠・畑の枠を作成（ブロック、セメント、鉄筋、水道等）、6 月：田んぼの土作り、田植えを5年生全員で行なった、9 月：稲刈り、11 月：脱穀、もみすり準備、収穫祭、12 月：わら細工体験、2 月：ぬかみそ作り
実践の成果：	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 米の苗を植え、収穫・脱穀をし、それをみんなで食べることによる、植物の命や自然の循環の実体験</li> <li>● 田植え→除草・稲刈り、脱穀・精米→炊飯による、生産活動の実体験</li> <li>● 「わら細工」を作ったり、ぬかづけを作り、ものを大切にするを知ることができた</li> </ul>
成果として特に強調できる点：	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 校内に、水田と畑を新設したことにより、児童が積極的に米作り、野菜や草花などの栽培活動に親しみ、それらをより身近に感じられるようになった。</li> <li>● 物を大切に、生産することの喜びを味わわせるという観点から、水田・畑の設置をきっかけに、さらに様々な環境教育への興味・関心が深まった。</li> <li>● 新設された田や畑が本校の環境教育のシンボルとなった。</li> </ul>

# 成果報告書

2011 年度助成	所属機関	横須賀市立浦郷小学校
タイトル	児童が積極的に自然にふれることができる環境整備	

1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）
2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）
3. 実践の内容
4. 実践の成果と成果の測定方法
5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）
6. 成果の公表や発信に関する取組み
7. 所感

## 1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）

### ① 自然を大切にしようとする態度の育成

本格的な「田んぼ」を使った米作りを行うことで、児童が積極的に自然環境にふれあい、そこから見出した問題を主体的に解決していこうとする姿勢が身につくだろう。その学び方は、環境学習に留まらず、他教科の学習においても活かしていきたい。

環境学習を通して、地域の自然環境について目が向き、自然を大切にしようとする態度が養われる。児童を通して家庭にも自然愛護の考えが広がっていくものと思われる。

### ② 物や生産することの大切さを実体験から学ぶ

水田や畑における環境学習を通して学んだ成果は、校内の児童に向け、発表する機会を設けていく。また、日常的にも校内の掲示板を利用して、成果を発信していきたい。

国語科においては、環境学習の成果を題材に、それを分かりやすくまとめ、プレゼンテーションしていく学習が考えられる。図工科においては、栽培活動の体験や収穫したものを題材にして、創意あふれる作品を作り上げることができるだろう。

## 2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）

2012年 夏 一つ目の田んぼの枠を作成

2013年 冬 二つ目の田んぼの枠・畑の枠を作成(ブロック、セメント、鉄筋、水道等)

2013年 6月 山形県酒田市グリーン・ツーリズム推進協議会会長 小松 賢氏を招き、田んぼの土作り、田植えを5年生全員で行なった、

9月 稲刈り、

11月 脱穀、もみすり準備、収穫祭、

12月 わら細工体験、

2月 ぬかみそ作り

※「収穫祭」で使う茶碗は子どもたちが手作りしたものを使った。また、汁物は山形の小松氏の郷土料理である、「芋煮」にした。

### 3. 実践の内容

#### 田植えの準備

山形県の庄内地方の小松氏をお招きして、土づくり、しろかき、田植えを体験しました。

子どもたちは慣れない作業に戸惑いながらも楽しそうに活動していました。



#### 稲刈り・干す

ハサミで力いっぱい根元のほうを切りました。切った稲は、物干し竿に干して水分を抜きました。

#### 脱穀・もみすり

定規、ソフトボール、すり鉢、ザルなど身の回りにあるものを活かして行いました。予想以上の米の量に驚きながら、一生懸命頑張りました。



#### 収穫祭

自分たちの育てたお米を炊いて、お家の人には山形名物の「芋煮」を作っていたいで、おいしく食べました。

子どももおとなも大満足でした。



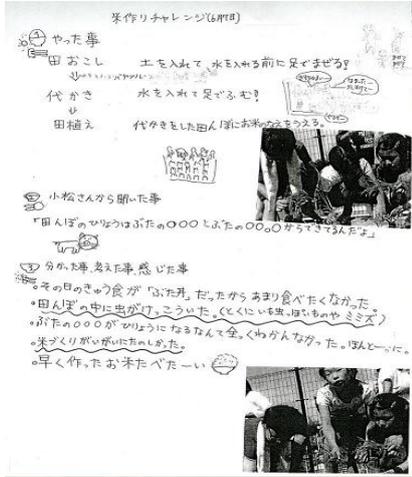
#### しめ縄・ぬかづけ

追浜地区社会福祉協議会の方を17名お招きして、しめ縄の作り方を教えていただきました。子どもたちは、自分なりの作品を作りあげました。さらには、できたぬかを使って、ぬかどこを作り、野菜を入れて、食べました。

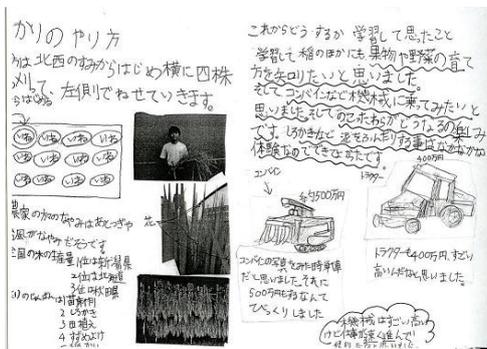


## 4. 実践の成果と成果の測定方法

活動ごとに写真を入れて「振り返りカード」を作った。必ず「どんな学習」をしたのかと、「分かったこと・考えたこと・感じたこと」を入れるようにした。子どもたちの感想の中からその成長を読み取ることができる。



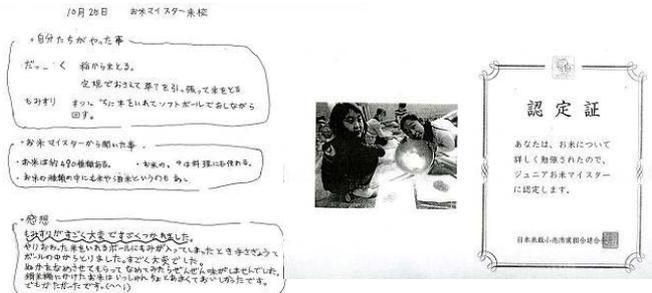
はじめは躊躇していた児童たちだが、田おこしや代かきでは裸足になって「きゃっきゃつ」と言いながら楽しんでた。ゲストティーチャーの小松氏の話もはじめて聞いたことが多く、自然を受け入れて農業をすることの楽しさや難しさを知ることができたようだ。また、小松氏が作った肥料や工夫を知ること、よいキャリア教育にも繋がっていった。よい土は、虫やミミズが多いこと、なによりも肌で感じた土のひんやり感に、自然と触れ合うことの大切さを知ることができた。



稲を無事収穫できたことにより、自信を持つことができたのか、「果物や野菜を育てたい」「コンバインやトラクターの機械に乗ってみたい」など、興味・関心の幅を広げることができた。また、自分たちの手で代かきから稲刈りまでを行い、苦労したことで、機械は仕事が早く進んで便利であることにも気づいただけでなく、機械の値段を調べたりして、実際に使うことの大変さにも考えを巡らせていた。

### もみすり・脱穀・精米

ゲストティーチャーに「お米マイスター」の鈴木氏を迎え、もみすり・脱穀の大変さを感じる事ができた。お米マイスターの知識の広さやこだわりに感心をしていた。



### 収穫祭

保護者の方々と活動を共にすることにより、児童の活動についての理解をしてもらうことができた。また、保護者にも食の大切さをアピールすることができたと思う。

### ぬかみそづくり

はじめてキュウリを漬けたとき、ちょっと漬けすぎてしょっぱいとの意見が多かった。次に何を漬けようかというときに、色々な野菜が候補に出たが、「キュウリをもう一度漬けたい」「もっとおいしいキュウリを漬けたい」と意見が多く出た。初めのころに比べ、ただやってみただけではなく、一つのことを追求しようという姿勢が育った。

### しめ縄作り

ゲストティーチャーに社協の方々を迎え、日本の伝統や文化に触れることができた。また、地域の方々と触れ合うことにより、コミュニケーションの大切さに気付くことができた。

## 5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）

浦郷小学校における、初の田んぼを使った稲の学習であった。そのため、様々なことが子どもたち、学校にとっての初体験であった。そのため、今年度の学習をまとめていくことは、とても重要である。今後は、次年度の5年生への繋がりを持たせるために、ポスターセッションなどを行い、次年度へのさらなる学習に活かしていきたい。

また、社会福祉協議会の方に教えていただいたしめ縄、昔遊び、昔ながらの歌を学習し、伝統文化についての意識が高まってきた。身の回りの歴史を学ぶことで、米作りには長い歴史があるということを学ばせていきたい。

米作りによって、日本の文化が発達してきたという経緯がある。日本の歴史は米作りと共に歩んできたことを学ばせていきたい。

## 6. 成果の公表や発信に関する取組み

※ メディアなどに掲載されたり放送された場合は、ご記載ください

- 平成25年11月25日に本校で実施された学習発表会の場で、『庄内平野の米作り』と題して、全校児童・保護者の前で成果の発表をした。
- 「田んぼ作り」～「田植え」～脱穀・精米～ぬかみそ作りまで、一連の経過・成果を PTA 広報誌「浦郷だより」の「田んぼのあゆみ特別号」として、保護者および地域の関係機関に配布した。

## 7. 所感

この度、日産財団「理科教育助成」をお受けすることができ、かねてから本校の環境教育の中の懸案であった稲作に対する実体験をさせる「田んぼ」及び野菜作りを実践できる「畑」を建設する運びとなった。

今まで「バケツ稲」や「プラケース稲」しか目にしたことのない児童は「田植え」を終えたばかりの水田を見て誇らしげに目を輝かせていた。隣接して作った「畑」には、トマト、キュウリ、ナス、インゲンマメがたわわに実を結んだ。

実際に稲作りに参加した5年生以外の児童も入れ替わり立ち代わり「浦郷の田畑」を訪れて観察をしていた。

八百屋さんやスーパーのパックに入っている野菜しか見たことのない低学年の児童も、興味深くキュウリやトマトを見上げて絵に描いていた。あきらかに本物を見せたこと、実践をさせたことからの成果は上がったと確信をした。そして、本校の環境教育のグレードがさらにアップしたと自負している。